

支那經濟史考證

加 藤 繁 著

上卷昭和廿七年三月、下卷廿八年四月
東洋文庫論叢第三十四 上・下

上八〇〇圓、下一二〇〇圓

上卷六九〇頁、圖版六頁

下卷七九〇頁、小傳年譜一〇四頁、圖版八頁

昨春上卷が刊行された故加藤繁博士の論文集「支那經濟史考證」は今般下巻が世におくられて完結した。今迄なじみの論文が多いのであるが、今こうして二冊にまとまつて通讀してみると、又新しい本を讀むような印象を受ける。それ程古くして又新しいのである。下巻の終りに、榎一雄氏の筆になる博士の小傳が加えられて、この論文集を一層有意義なものとしている。それによると、博士はその分身ともいへば論文集の集成、論文集の完成を最後の天職と考えられて、その修訂に身命をそまがれたとのである。「支那經濟史考證」という題名もすでに出来上つていたという。丁度あの戦争の最中であつた。静岡縣の疎開先で、ひたすら勉強された。夫人が苦心して買い蒐められた愛用のGペンが、急激にその數を少くして行つた。蠅頭大の細字でギッシリつまつた紙片が次々と舊稿の天地に張りつけられて行つた。あるものは殆んど書き改められた。長い追論が幾つか加えられた。かくて第一篇(上巻に當る部分)の原稿

は間もなく完成した、と榎氏は書いておられる。従つてこの本は決して普通の舊論文のよせ合せの記念もしくは追悼出版の類では決してない。それは博士の最も新しい著書とも云う可く、博士の學究生活の總てである。その事を榎氏の小傳は更に詳しく述べている。更に戦局が苛烈になつて來ていたので、萬一を慮つて原稿の複本を作りその安全をはかられた。その後、實兄の逝去、更に戦災による自宅、藏書の焼失などにも屈せず、信州に居を移して、論文の修訂はつゞけられたが、その日の朝迄書き入れをされつゝ、その夕方永眠されたという邊りを讀んで、全く身のひきしまる感じに打たれたのである。支那經濟史・支那史の研究に、少くも一度は通らねばならない重要な論文が、雑多の雑誌を探しまわる苦勞なしに、手をのばせばすぐ机上に求められるこのような形で刊行されるについては、博士のこの最後の身血を注いだ努力の賜であり、それがあの暗い谷間の、あの困難な時期に續けられたことを憶う時、學問に身をさげける者の尊さを痛感すると共に、この論文集を一層有意義なものとしている。

本書名づけて、「支那經濟史考證」という。和田博士が戯れに、「……加藤博士の論文集こそ支那經濟史考證と稱すべきだ」と言われたら、博士は膝をたゝいて喜び「ほんとにそうだ」というので、その命名を採用した由(和田博士序文による)蓋し當を得た書名である。和田博士は、「今日は考證とかいう言葉は餘り流行らないが、故人の意志を尊重して云々」とあるが、その事をおいても、正しく經濟史考證である。というのは、博士の研究方法は、經濟史々料の難語の意味から追求された。そしてそれに關係ある史料のカードを綿密に蒐集し、その史料を出来る限り客觀的に、精密に、解釋し、

批判し、排列して論文を綴つておられる。それ故にそれらの論文は、何かの一つの現象について、極めて實證的な、緻密な、手堅い考證が大部分である。しかしこのことは、支那經濟史という未開の曠野を獨力で開拓をはじめられた博士としては、止むを得ぬ途であつたと思われる。

しかし博士は、これはあく迄基礎的な仕事であり、これが支那經濟史であるとは考えておられなかつたようであつて、究極の目的は、支那國家史、支那國民史の総合的な理解把握にあつたという。けれども又その事情を知らなくても、所收の論文のみについてみても、單なる考證的價値に終るものではない。たとえ一々が考證に終つていても、博士が考證された事象は、悉くと言つてもよい程、その後、又今日の中國經濟史のみならず、中國史研究に不可欠のものとなつてゐる。又常識の如くなつてゐるものさえある。上卷に收める所の唐代の諸研究——莊園・草市・倉庫業・居停・停場・榷坊などの考證・研究にとりあげられた事柄及びその結果を、その後の東洋史學の發達は不可欠のものとしてゐる。中國史の時代區分の論争、唐代の土地所有の問題について莊園の問題が一つの中心となり、多くの研究成果が發展されて來てゐる。又唐代後半における商業・貨幣經濟の發達と宋代のそれとの關係も亦、中國史の時代區分・体系を立てるに當つての中心事項の一つになつて居り、草市以下の博士の研究はこの分野を開拓したものと云うことが出来る。又日野開三郎氏等によつて活潑に展開されて來た、宋代の紙幣の問題についても又そうである。こう見てくると、その考證は、中國史全体の中において、眞に歴史的なものだけを採り上げておられる點において、それは難語の考證以上のものを、經濟史考證を越えた支那經濟史一

般そのものを背後にもつてゐる。その意味において、博士は考證學者ではなく、偉大な歴史學者であり、しかして又眞の考證學者である。究極には中國史の総合的把握を目的とされた博士が、又「考證」なる書名を喜ばれた所以である。

所收の論文は概ねなじみ多いものであり、又五十八篇に上る一々を紹介、論ずる事も不可能であり、又その必要もない事と思うので大体を擧げれば次の如くである。

- ① 先秦及び秦漢時代の貨幣史に關するもの。「西漢前期の貨幣特に四銖錢に就いて」など五篇。
- ② 漢代財政に關するもの。「漢代に於ける國家財政と帝室財政との區別並に帝室財政一斑」など三篇。
- ③ 唐代の莊園土地制度及不動産に關するもの。「唐の莊園の性質及びその由來に就いて」など五篇。
- ④ 唐宋時代の商業・都市の發達に關するもの。「唐宋時代の草市及びその發展」「唐宋時代の倉庫に就いて」など八篇。
- ⑤ 及び「支那古田制の研究」。以上は昨春すでに上卷として刊行された。その後をうけて、下卷では、⑥ 「交子の起源に就いて」以下交子・會子・關子など一聯の宋代の貨幣(主として紙幣)史に關するもの七篇。
- ⑦ 宋代の商業・貿易に關するもの。「宋代商稅考」「宋と金國との貿易に就いて」など八篇。
- ⑧ 宋代の戶口に關するもの。「宋代の戶口」など五篇。
- ⑨ 清代の貨幣金融・財政・商業に關するもの。「咸豐期の貨幣に就いて」「清代に於ける錢鋪錢莊の發達に就いて」など一〇篇。
- ⑩ 稻・甘蔗など産業史に關するもの。「支那に於ける稻作特にその品種の發達について」など六篇。
- ⑪ その他一篇及び附録五篇が收められてゐる。尙上卷には和田清博士の序文、上下卷共「あとがき」があつて、各論文の學史的位置づけなど解説は便利。又下卷に索引を附する。又下卷の加藤博士

小傳・年譜・著作年表は博士をしのぶよき記念である。

とりとめもない事を書きつらねて、紹介となつたかどうか疑わしいが、上巻下巻完結に當つて、昔博士の論文を讀む爲に、所載の雜誌を圖書館やあちこちさがしまわつて、随分教えをうけた事を憶い起しつゝ、なつかしく通讀して、感ずるまゝをしるした。

最後に博士の論文が、餘り多くの諸誌に分散していて、手軽に參照し難いというだけでなく、私の如く戰災で書物を焼失した者で、わづかに手もとに集めていた博士の論文の二三さえ失つて了つた者にとつて、このような形で手許におくつて下さつた編者、又博士が途中迄で殘された論文の修訂の勞をとり、解説・索引を附して閲讀の便を猷身的に取られた關係諸氏に深甚の謝意をさしげる次第である。これによつて、博士の研究が、更に發展され、もしくは克服されて、中國經濟史が、一層深く廣く展開することであらう。

(善峰憲雄)